宮沢賢治の意図

湯之上　早苗

一　迷いの跡

賢治はその臨終の際に、父親に「何か言い残したいことはないか」とたずねられて次のように答えている。

戸棚の中に、詩や童話の原稿がありますが、あれはしょせん迷いの跡だから、書物にすることもいりません。ただお願ひしたいのは、国訳法華経千部を印刷して、これを知己友人にわけ下さい……略……。（注1）

その法華経の後記は

合掌、私の全生涯の仕事はこの経をあなたのお手許に届け、そしてその中にある仏意にふれて、あなたが無上道に入られんことをお願ひするの外ありません

と書かれるはずであった。この話は事実であろう。しかし仮りに事実であったにしても、賢治の伝記や文芸を対象に研究する者にとっては得体のしれぬ遺言であることは否定できない。このことばをわざわざここに取り上げたのは次のような理由によるのである。

賢治研究の問題点といえば少し大げさになるが、彼の言行や作品にかなりの親しみを持ちながら、私はいまだに「結局のところ、彼は何を生涯の目標にしたのか」という問の答を出せないでいる。農民社会への献身、あの羅須地人協会での働きを代表的行為とする一連の農村活動が彼の本心であった、いや究極の仕事であったなどと信ずることはできない。今日、賢治に関心を持つ人の中にはそれを肯定したいと思う人もあろう。残念ながら彼の言動の大部分はそれを裏書きしてくれない。賢治はどんな仕事でもゆるがせにできない人のようで、手をつけると徹底的に実行する、特に他人への奉仕となると我を忘れて飛び込むという気質を持ってもいる。それに随分と気の多いところもあって、あの短かい生涯にさまざまなものを計画し、手をつけようとしている。人はその表面を見てだまされるのである。彼の置かれた位置は、家の長男としての気苦労なものであった。そして彼は病気に悩った。いろいろの要素がからみあって、結局彼の為し得た仕事は彼の意図からは程遠い、異質のものであったことも確かである。

ところで、私の目的は彼の作品を追求することにある。他のこと

はさておき、彼の作品、つまり文芸が、彼の生の中でどのような位置を占めていたのかと、表からも裏からもたずねてみなければならないのである。もちろん、この問は、おそらく彼の全生涯を眺め尽くした後にだされるべきものであろう。中村稔のように(注2)、「家」の観点から生涯を見るという態度も必要であろう。「宗教」という覗き穴から観察することも大切であろうが、私はこの限られた紙数で、特に「文芸」を中心としながら、「彼は何をやろうとしたのか」「そして何ができなかったか」という問にしぼってゆきたいと思うのである。

先程引用した臨終のことばに私は二つの意味を見出している。それが最後のことばであれば、そこにはよかれあしかれ彼の正真の気持ちが表われているはずだ、というのがその一つ、しかしまた同時に、このことばはつまり何物も語ってはいない、というのがその二つである。未来にかける何物もなくなった時の諦念からでたことばは彼の一生で最も重大な一言であることに間違いはないが、彼の前に無限の未来が拡がり続いている時の人間の心持ちを説明してくれるものではなかろう。だが、彼がここに自分の作品を「しょせん迷いの跡」だと断定したことは重大である。よかれあしかれ、彼の文芸に対する位置が一言で言いあらわされていると思うからだ。私は、彼が文芸を軽く見、否定していた、といっているのではない。むしろその反対である。他のことには触れずに「文芸」だけに触れたということが、軽視しきれなかったことの証拠である。全生活をずっと変わらずに創作し続け、妹トシの死のその日に長編の挽歌(注3)を三編まで創らずにはいられなかったほどの異常な創作欲を持っていた、彼はそんな人物である。そして最後までその作品を持ち歩いた人物でもある。彼の大きなトランクにはいっていたものは、たといそれが役にもたたぬものであっても、彼自身にとっては相応に大切なものだったのだ。(注4)

賢治はかなり本気に仏教の中には入りこんだ人物である。その彼が「迷い」という時、「迷い」の何物であるかを知らないことはなかっただろう。簡単に捨てきれるものであったら捨てていた。捨てられなかったからこそ、それは迷妄の跡と呼ばれるのである。後に触れるところではあるが、大正十年に家出のかたちで上京した折、故郷の友人あてに――これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です(注5)――と、かなり高い調子で宣言した彼である。その彼が、最後の時になって「迷いの跡」だとつぶやいた時、心の中に、文芸への底知れぬ愛を感じ取っていなかったとしたらこのことばは無意味である。いや、それは愛などと呼べる代物ではないかもしれぬ。むしろ「とらわれ」である。「執着」そのものである。何かにつけて、われわれは愛することなどできはしないのだ。全て、何物かに「とりつかれる」のではないか。だからこそ抗し難い魔力で、それは人間を引きずりまわすのであろう。気がついた時、人はしばしば、ぼろぎれのように置き去られている自分を見出して、途方に暮れるのである。賢治が「文芸」を一生の仕事と考えていたかいなかったかということはこの場合問題にならない。彼は事実としてそれに引きずりまわされていたことを認めたのだ。そして、その価値を否定することによって、逆に、否定されるはずのものの強大な力を背定したのである。

それならば彼は、あの遺言に見られるような宗教的祈りや実践に対してどんな立場にいたのであろう。「文芸」と同じく、この問題

も速断は危険である。それは「迷い」ではなかったかもしれぬ。が、この祈りや実践が文芸とからみあい始めると甚だ複雑な姿を示してくる。あるいはうんと皮肉に考えて、あのことばは結局彼が実践できなかったものへの希求を表現したのだと取ることもできるだろう。しかし、宗教の問題は後にまわそう。いまは、アランが幸福論の中で「人は結局欲しないことはなに一つしなかったのだ」と、逆説的に説いていることばを援用して、彼の行動歴を見渡してみたい。

二　何をやろうとしたか

大正七年、二十三才の時に彼は盛岡の高等農林を卒業した。科は農芸化学であった。この年の二月頃から、六、七月頃にかけて彼はしばしば父親あてに便りを出しているが、そのほとんどは彼の職業についての計画と頼みである。事実は、卒業と同時に研究生となり、稗貫郡の土性調査を嘱託せられて、五年間続くのであるが、その前の二月一日づけの便りでは土壌の分析などがたいして意味もなく、自分にとってはむしろ不利でさえあること、自分のやりたいことは、沃度製造・海草灰の製造・木材乾溜などであることを訴えているが、そういう趣旨の便りは以後もしばしば出している。しかし結局容れられず、そのまゝになってしまった。彼が化学工業に興味を持っていたことは書簡からわかるのだが、しかし企業として計画したことは随分と変なのもある。ほとんどが思いつきのごときものであるが、要するに彼は自分ができることで父親にも満足せられるような仕事を望んだのであろう。それはともかく、彼が

可成は花巻の町にて店を開かざるも差支なき様の商売無之候や（大正七、七、二三）

と付言したことは、彼がなるべく父の下を離れようとしていたことのあらわれである。同じ手紙の末尾に、

実は右の事業にて御陰を以て一人前と相成り候はば東京へ参りて（十年や十五年後にても宜しく候）もう一返語学や数学を勉強したくと存じ候（それまでに独逸語は卒業すべく候）

と書いたことも見逃せない。彼にとっては、化学工業的の仕事ですらが自分の本来の仕事とは思えなかったのであって、それは何か他の仕事にとりかゝるための手段であったのだ。はっきり言えば、自分が（父から）独立して何かをするために父親を納得させる術であった。が、また、語学や数学の勉強がはたして彼の本心であったろうか。それもまた何かのための準備ではなかったろうか。

大正七年の終り頃から翌八年の始めにかけて、妹トシが病気のために入院し、看護のために彼はしばらく東京に滞在する。一月二十八日になって、彼は「この侭東京で職業につかせてくれる様に」父親に懇願する。その仕事というのは鉱物合成であり、前に彼が希望した林業とは何の関係もない。父も一度はこれを許したのであるが、不安も感じたのであろう。二月五日に賢治がだした便りの末尾は

私の職業等は又後の問題に致しても宜しく候へどもそれ程迄稼ぐと云ふ事が心配なるものに御座候や。何卒私に落ちつきてまじめに働くべき仕事を御命令被成下度候。車の後押にても純粋の百姓にても何にても宜しく候。又は私に自由に働く事を御許し下され候や。宝石等を扱へばこそ都会に住むことも必要に御座候。どこ

にでも宜しく候。

と、全く取り乱した極端なことばで結ばれているのである。だが、これはおそらく彼の素面なのだ。父親がそれを許さなかったと同じように。彼にとって、職業などはどうでもよかったので、要するに「自由に働らく」ということが当面の願いであったのだ。だが、この「自由に働らく」ことから彼は何を生みだそうとしたのだろうか。以後、彼は花巻により戻され、家業の手伝い、つまり店番をしていた。

大正十年の一月に彼は突然上京した。家出のかたちである。この間の事情はその直後に彼自身が友人の関徳哉にあてた便りにくわしいが(注6)、それによると、父親との宗教的対立ということになっている。日蓮宗の国柱会の狂信者になりかけていた彼のことであるから(注7)、それも不思議ではないが、私は単純にそれを信じようとは思わない。こうした、興奮した手紙をそのまま信じたくないということもあるが、それよりも、この度の家出こそ彼が度々計画していた父親からの脱出であって、それがこういうかたちをとってあらわれたのだと思う。「さあ、ここで種を蒔きますぞ」(注8)という彼の決意にしても、ただの信仰上の相違から生じたものではない。信仰だけのことだったら何も東京へ出ることは必要ではなかろう。法華経に対する彼の信仰を私が疑っているわけではない。しかし、彼が父親に「御帰正下さらぬ限りは花巻へ帰りません」(注9)などと言ったりするのは普通ではない。宗教とはさほどに了見のせまくあろうはずはないと思うからである。それからはまた、上京中に彼のやったことを見ると、それが信仰上のものであったとしても随分と風変わりなことである。この時代に彼の童話作品の多数が創られ、構想がかたちづくられたもののようであるが、その意図については前にも述べたように「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です」と前述の便りに揚言したごとく、文芸を弘法のかたちとしたと考えてもいいだろう。しかし、宗教が芸術であり、芸術が宗教であり得ると本気で考えていたとしたら、彼の抱いていた宗教観は誤謬であるか、もしくは天才のみに許されるものである。こういう宗教観であればこそ、それは故郷ではなく東京で行なわれる必要があったのではなかろうか。同じ十年の八月十一日づけの便りには、故郷で文学活動をしている関徳哉あてに

どうか早く生活の安定を得て下さい。いいものを書いて下さい。文壇という脚気みたいなものから超越してしっかり如来を表現して下さい

と書いているのをみても、賢治の考えは変わってはいない。

さて、童話の作品の制作動機がもし右のようなものだとしたら、宗教即芸術という理念は彼の生涯の目的となり得たであろう。後年の「グスコーブドリの伝記」や「銀河鉄道の夜」につながる太い流れとして辿りうるであろう。問題はこの考えがどこまで保ち続けられえたかということにある。童話のみならず詩作においても彼は宗教というものを離れなかった。「春と修羅」(注10)というあの難解な詩集を自費出版した後で次のように言う。

これらは到底詩ではありません。私がこれから、何とかして完成したいと思って居ります、或る心理学的な仕事の仕度に、正統な勉強の許されない間、壊過の許す限り、機会のある度毎に、いろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序

文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しようと企画し、それを基骨としたさまざまの生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです。……（略）……私はあれを宗教家やいろいろの人たちに贈りました。その人たちはどこも見てくれませんでした。……（略）

全く異なった宗教観――それにしても、彼がいみじくも書いているように、正統の勉強の許されない間、境遇の許す限り（この頃彼は花巻農学校の教師であった。）試みたのが詩作であったのならば、彼が言う「ある心理学的な」仕事とは何であったのだろう。おそらくそれも彼自身にとってみれば「文芸」そのものではない、宗教につながる問題だと考えていたのだろう。しかし、その具体的な内容はやはり分明でない。この手紙が書かれてから後、ふたたび「心理学的」な仕事について触れたことばは残されていないからである。そしてそれは後の彼の文芸的営みにも、行動にも、それとわかるかたちではあらわれてこないのである。

彼が農学校を辞めたのは大正十五年の三月であるがその理由は明らかでない。しかし、十四年の十二月二十三日づけ、森佐一あての便りに、

学校をやめて一月から東京へ出る筈だったのです。延びました。夏には村に居ますから……略……

とあるのをみると、またも彼は東京へ出ることを考えていたことが明らかになる。しかし、さらにその前の六月廿七日づけの便り（教え子あて）では

わたくしも来春は教師をやめて本統の百姓になります。

と書いていたりして、彼が何をたくらんでいたのかはっきりしない。百姓にしても、東京行きにしても、どちらも父親からみれば許し得ないことであったのは同じだが、十二月一日づけ、清六氏あてのものでは辞職のことを「新しい校長が来たりわたしも義理でやめなければならなくなったり」と告げている。

しかしながら、彼が百姓を好んでいたのではないことは確かで、「学校をやめて今日で四日、木を伐ったり、木を植ゑたり病院の花壇をつくったりしてゐました。もう厭でもなんでも村で働かなければならなくなりました。……略」（大正十五年四月五日　森佐一あて）と言ったりするのをみると、学校をやめたのも彼におもわくがあってのことなのだろう。彼がやろうとしている仕事（それが何かはわからぬが）の完成のためには少なくとも百姓であるよりは東京へ出た方がよかったのだということ迄は言えそうだ。そうしてみれば、彼が辞職後四ヶ月ほどして始めた「羅須地人協会」という仕事も、必ずしも本意にあった仕事だとは言い切れない。故郷においては何かと白い眼で見られることを人にもいい、詩にさえも書いて歎いていた彼が、東京行きよりも農村活動のほうを選んだとはどうも考えられない。

農村活動にしてもきわめて非現実的な一面と非常識な行動面とがアンバランスに出ている。彼が巷間にいわれるごとく真の科学者であったなら、もっと別の道を選んだかもしれない。彼は科学者ではなかったとまで断言しないが、彼が詩人であったほどには科学者ではなかったのだ。この農村活動において、彼が講義した「農民芸術概論」はそれ自体まことに美しい夢ではあるが、夢であるに過ぎないという点において彼の非科学性をあらわしているのだ。注意すべきことは、ここでも彼は「労働」を「芸術」に高めようとしてい

る。かつて、宗教を芸術とし、芸術を宗教だとした彼が、更に労働をも芸術にまで高めようとするとき、われわれは彼の世界観がすべて「芸術」を中心になりたっていることを認めざるを得ない。そのことを彼が知ろうと知るまいと、これは事実である。

この農村活動に失敗してからの彼は、その失敗が病気によるものであっただけに、いま観察の対象とするには足らぬように思う。しかし、文芸活動だけは相変わらず活発に行なっていた。というよりも、父母のもとに帰臥して事実上行動の自由を持たなかった彼にしてみれば、行ない得るものは創作だけだったろう。むしろ創作だけが行動であったのだ。ところが不思議にも彼が病臥してからの作品には見るべきものが殆どない。特に文語詩をつくりはじめるに至っては退歩以外のなにものでもない。そして、過去の自分の無謀な試み——憧かばかりの才をたのんでいた——を悔むことが多くなってくる。「雨ニモマケズ」のごときはもはや文学ではない。それは希いのありのまゝの表現にしか過ぎない。

三　つまり何が行なわれたか

性急な行論ではあったが、賢治が果たそうとした仕事を辿ってきて、結局それが何であったのか具体的につかむことはできなかった。彼のことばからも、彼の行動からも、それは明らかにならない。ただ一つわかったことは彼が明らかに無謀で大それた宗教的行為を行なおうとしていたらしいということである。しかもそれは農村的活動であるよりはむしろ文筆活動であったことである。ひるがえってわれわれの立場から見れば、その行為や目的は、宗教や労働とは別物である「芸術的活動」を根幹としたものであった。ところが彼の芸術性とは、空想の産物であるよりも行動から生みだされるものであったために、労働ができなくなった時に芸術もまた生まれなくなったようにみえる。おそらく彼自身においては、つまり「賢治」という一個の「生」の中では宗教も芸術も労働も不可分のものであったのだろう。さてこそ無謀にみえる揚言も可能ではあったのだろう。

しかし、最初に述べたように、臨終の時になって彼は自分の一生を通じて「とりついていた」文芸そのものの魔力を認識した。おそらくそれが彼を滅ぼしたに違いない「文芸」を否定しようとしたのである。だがそれを否定することは彼自身を否定することになりはしないだろうか。

私の提出した問題は格別に目新しい結論を得られなかったようである。ただ、従来よくいわれているような賢治観、たとえば彼を宗教詩人であるとしたり、科学者にして且つ詩人である人物と片づけたり、彼の本領が農村活動的実践者にあるとしたりするような、少しばかり早計な結論に対して水をさす位のことはできるだろう。そして彼が結局詩人でしかありようがなかったという素朴な結論だけは出すことができるだろう。

注1、宮沢賢治物語・関登久也著所収。

2、中村稔はその著「宮沢賢治」で「家」と「父」と「賢治」の問題にふれて、たいへんくわしく考証している。書簡と年表を中心にしているのであるが、賢治研究としては最も精確なものである。なお、この著はユリイカ版のものと、五月書房版のも

のがあり、さらに定本として出版され直したようであるが、内容はだいたい同じである。

3、「永訣の朝」などをさす。「死」をうたったのではなくて、自分自身の「心」を見つめた詩を三編も創るというのは普通ではない。

4、賢治は東京に出て自炊した時は相当数の童話を書いたが、帰る時に大きな革トランクを買ってそれを全部つめこんで持ち帰った。また、彼の作品に「革トランク」という小品がある。町に出て学校を卒業した平太が帰る時に大きな革のトランクを買って帰り、故郷の人はびっくりしたり感心したりする。建築師だから親方の使い古した絵図を三十枚ばかり貰ってトランクにつめて帰ったのだが、さて村で仕事をすると、とんでもない家ができる。階段がなかったり、入口がなかったりするような家ができてしまうという話である。ある意味で彼自身の戯画である。

5、大正十年一月廿九日三十日・関徳哉あて封書。筑摩版全集第十一巻による。特に断らない限りはこの全集による。

6、注5の便りである。

7、大正九年のことである。

8、注5の便りである。原文の一部をあげる。（……さあここで種を蒔きますぞ。もう今の仕事（出版、校正、著述）からはどんな目にあってもはなれません。……）

9、大正十年二月二十四日づけの便りで次のように述べている。（……一応帰宅の仰度々の事実に心肝に命ずる次第ではございますが御帰正の日こそは総ての私の小さな希望や仕事は放棄して何なりとも御命の侭にお仕へ致します。それ迄は帰郷致さないこと最初からの誓ひでございますから……。）

10、大正十一年一月起稿、大正十三年四月出版。

11、大正十四年二月九日、森佐一あて書簡。

（兵庫県立西宮高等学校教諭）